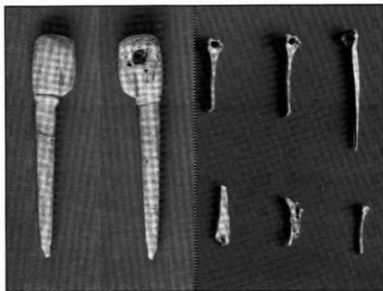


オセドウ貝塚発掘調査概報

(第1・第2次発掘調査概報)



{ (左) オセドウ貝塚出土、骨(シカ)製ヘアピン }
{ (右) タイの鐘線による針 }

1992・3・30

青森県北津軽郡市浦村教育委員会

発刊にあたって

市浦村は『安東文化のふるさと』をキャッチフレーズに史跡観光で村の活性化を図ろうとする計画があり公園や道路など施設整備のための工事が多くなってきています。

このオセドウ遺跡も公園化するために、四阿、便所、遊歩道等の設置をするということで平成元年、2年の2か年で発掘調査を実施しました。

ここは貝塚として知られているところで大正12年には人骨が発掘されるなど重要な遺跡であることの認識の上になつての工事と発掘調査の計画をたてました。

発掘は工事にかかる部分だけを発掘調査し、砂利を敷く工事の部分は調査対象としませんでした。

遺跡の現状保存を原則として、発掘調査をするのであれば学術的に全面発掘をしたいという希望から部分発掘調査はできるだけ避けたいという考えから、調査対象範囲を絞りました。

発掘調査にあたっては日本考古学協会々員新谷雄藏先生にお願いして実施しました。

発掘面積は小さなものでありましたが、出土した貝の量が多く、その調査に数か月を費やしてしまいました。予想をはるかに越える時間のかかった調査になり新谷先生には大変なご苦勞をかけました。

今回出土した土器類は元金木町立金木小学校々長の浅木全一先生の協力により復元し、当村の歴史民俗資料館に保管しております。

考古を研究している諸氏の研究に役立つことを期待して発刊いたしました。ご活用願えれば幸いです。

終わりに、本調査の指導担当なされた新谷先生を始め関係者各位のご支援、ご協力に対して深く敬意と感謝を申し上げます。

平成4年3月

市浦村教育委員会
教育長 木村義光

第1次発掘調査(A地点・B点)

(1989・11・29~12・9)

もくじ

発刊にあたって

目次

オセドウ貝塚研究史	3
例言	10
写真(写1～10 発掘スナップ、検出遺構、遺物の出土状況)	11
第1図 市浦村、オセドウ貝塚付近地形図(A)(B)	21
第2図 Aグリット、セクション図(A・B)	23
第3図 Bグリット、セクション図(A・B)	24
第4図 Aグリット、遺構平面図	25
第5図 Bグリット、遺構実測図	26
[I] 発掘に至る経過と調査要項	27
(1)発掘に至る経過	27
(2)調査要項	27
(3)発掘日誌	27
[II] 地形・層序	28
(1)地形	28
(2)基本層序(A・Bグリット)	28
[III] 検出遺構	32
(1)Aグリット—住居址、土壇・柱穴・焼土	32
(2)Bグリット—住居址、土壇・柱穴	32
表1 出土遺物分類表	36
表2 骨類調査表	37
[IV] 出土遺物	38
(1)縄文土器	38
(2)石器・浮石	38
(3)土師器(A・B)	38
(4)陶磁器	39
a、須恵器	39
b、珠洲	39
c、越前	39
d、青磁	39

e、産地不祥陶器	39
(5)支脚・羽口	40
(6)捺文土器	40
(7)土錘	40
(8)鉄製品	40
〔V〕考察	41
☆参考文献	
写1 遠景、記念写真	11
写2 発掘スナップ①～③	12
写3 発掘スナップ④～⑤ (⑥～⑦出土状況)	13
写4 Bグリットの状況⑧～⑩	14
写5 Bグリットの状況⑪～⑬	15
写6 Aグリットの状況⑭～⑯	16
写7 Bグリット遺構完掘状況⑰～⑱	17
写8 Aグリット遺構完掘状況⑳～㉑	18
写9 Aグリット遺物の出土状況㉒～㉓	19
写10 Bグリット遺物の出土状況㉔～㉕	20
〔資料〕	
A・P・L1～5 土師系土器(小形鉢)	43
P・L1～3 縄文土器・土錘	48
P・L4～6 土師器(坏形)、鉄製品	51
P・L7・8 土師器(坏形底部)	54
P・L9 土錘	56
P・L10・11 土師器(坏形底部・甕)	57
P・L12～15 土師器(甕形)	59
P・L16～18 捺文土器	63
P・L19 陶器(播鉢)	66
P・L20～21 須恵器(珠洲焼)	67
S・P・L1～2 石器・浮石・鉄製品、支脚、羽口	69
b・P・L1 骨類(イヌ・ウマ)	71
〔表1〕オセドウ貝塚出土、遺物分類表	36
〔表2〕オセドウ貝塚出土、骨類調査表	37

◎オセドウ貝塚研究史

(1) 位置 青森県北津軽郡大字相内字露草190番地

この地点は、伊勢堂とも呼ばれる丘陵台地で、相内部落の東方にあって、神明宮境内、(俗称、オセドウ)とも、土地の人々が呼んでいる。

面積約129アールで、神明宮境内のほぼ全城を遺跡が占めている。

*この遺跡は、明治の昔より村内外の有志、及び、有名な学者によって発掘され、広く学界に紹介された遺跡である。

次に順を追って、オセドウ貝塚発掘研究のあとをたどってみる。

(1) 明治の末頃

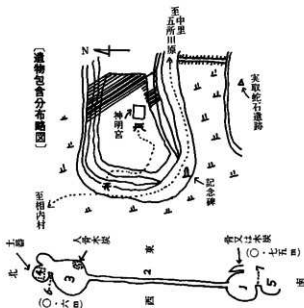
地元の三輪藤兵衛、中居勇の両氏が発掘し、径9cmくらいの皿形土器破片(須恵器か?)が出土した。この発掘の際、墓穴に人骨があったので驚き発掘を中止したとある。

(2) 大正11年頃

十三史談会(会長、奥田順蔵)は、墓穴群を発掘調査したが、同じ会員の泉伝十郎(当時、相内小学校長)が、調査したものを実際に測量したが、正確であったと述べている。

*参考までに、そのときの発掘位置と墓穴群の略図を示しておく。

*参考図



＊発掘した墓穴は、1、5、3、4の四基で、2は、坑道とあるが意味不明、南側の傾斜地は、貝塚で、幅約3.6mにシジミ、ハマグリ類が散乱し、周囲より多数の土器片が出土したと言う。

(3) 大正12年6月24日～26日

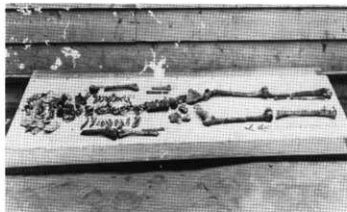
村内の有志による発掘調査が実施され、後に有名になったオセドウ人骨が発見された。

人骨が出土（最初は足部）したことによって村内の話題になり、村民が多数集まって、各自勝手に、人骨が出土した周辺を掘って大変な騒ぎになった模様である。

幸いなことに、このオセドウ人骨は、原形を大きく損なうことなく発掘されたようであった。

この人骨は、すでに示した略図の貝塚の上端、即ち、現在の道路面から約4.5mの位置に、頭部を西北に、足部は、東南にして出土したと記録されている。なお、この人骨は、相内の医師、矢倉宣孝によって復原され写真に残されている。

＊陸奥北津軽郡相内村出土人骨



陸奥北津軽郡相内村出土人骨

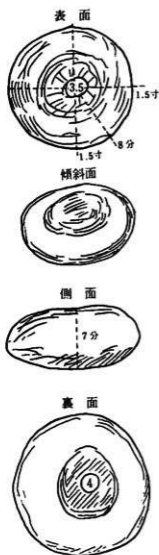
この人骨は、東北大学に保管されていたが、その後、東京大学に移され現在に及んでいる。しかし、近年返えされ、現在は市浦村歴史民族資料館に展示されている。

(4) 大正12、13年頃の調査

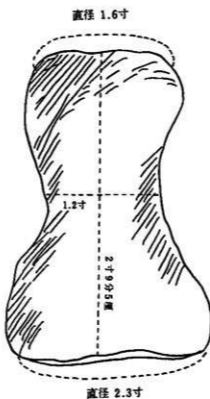
青森県内の人による調査で、(オセドウ人骨の出土後の調査) 出土遺物の記録が残されているので転記しておく、

* 出土遺物

- (a) 石斧、(b) 石製磨棒、(c) 首飾輪玉、(d) 角製針、(e) 土製管玉、
 (f) 壺形土器、(g) 土器片拓写図、(筆者注、拓影か?)



◀ 首飾輪玉一個。



▲ 石製磨棒 (磨石・磨潰石) 一個。
 底面に磨痕あり。孔棒形石器と同じ用途か。

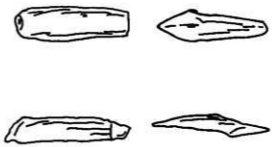


相内村発見

▲ 石斧一打製一・磨製二出土。長さ三寸一・三寸五分位。実質礫石。
 祖達の安山岩の石盤大のもの一個。礫石盤一個。



全長1.8寸



◀ 蓋形土器のやや原型



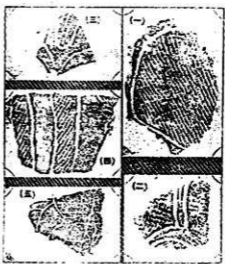
穴徑
0.15寸

▲ 土製管玉

▲ 角製針一個。長さ一寸一分五厘、幅の広き部分三分。漁用のもの。



陸奥北津軽郡相内村出土土器文様



◀ 土器片拓写図

(5) 大正14年4月

発掘に当たったのは、山内清男博士で、史前学雑誌にその成果を発表している。

博士は、この時2か所を発掘調査しているが、第一発掘地点は、前に人骨が出土した貝塚の北部で、表土中より薄手式の土器（別種の土器という表現をしているが、器種は不明）、土師系の土器、祝部類似の土器（須恵器か）、土錘、鉄片等が出土した。

その下の層は、焼土を含み、別種の土器、いわゆる薄手式の土器が出土している。

*さらに、その下の褐色土層には、少量の土器が含まれているが、他の遺物は存在していない。

*さらに、その下が薄い遺物包含層、貝層と続き、この二つの層の中から繊維土器の出土があった。（筆者注、当時は、円筒土器の用語が使用されていなかった。現在の円筒土器下層式が出土している）

その下が褐色土層、さらにその下が地盤と続いている。

*第二発掘地点では、炭米、土器片、石鏃、等を含む薄い層が幾層にも重なっていて、下層の遺物層は厚く、一部分は、貝層となっている。

上層からは、円筒上層式が、最下層からは、円筒土器下層式が出土している。

(6) 大正15年4月発掘

*発掘されたのは、長谷部言人博士で、博士は、人類学雑誌に発掘の結果を発表されている。

*即ち、本遺跡から出土した縄文前期、中期の土器に、はじめて「円筒土器」と命名されたのである。

その後、「円筒土器」は、前期のものを「下層式」、中期のものを「上層式」と区分して使われるようになったのである。

「円筒土器」という用語は、市浦村のオセドウ貝塚より出土した土器によって名付けられたものである。現在も、「円筒土器」と言う用語は使われており、縄文時代の研究史上、オセドウ貝塚は、重要な遺跡であったことが理解されるのである。

博士は、「円筒土器」の特徴を、ここで説明されているが省略する。また、大正12年に村人によって、発掘された人骨を「オセドウ貝塚人骨」として詳しく報告されている。

（筆者注—博士は、人類学者である。）

*その特徴は、

- (1) 壮年男子である。
- (2) 歯の摩耗は、少ない。
- (3) 縫合の連結が進んでいる。
- (4) 死因は、頭部の皮膚疾患か、損傷による骨膜炎かである。
- (5) 眉間隆起は、普通である。
- (6) 短頭である。
- (7) 歯のかみ合いは、下歯と上歯とがきちんとかみ合っている。
- (8) 齶の突出が弱く抜歯していない。
- (9) 長すね骨である。
- (10) 顔部の諸特徴は、石器時代人の通有性に近い、(以下、略)、さらに考察が加えられているが省略する。

(7) 昭和15年8月の発掘

*発掘担当者は、吉田格博士であったが、次年度に発表されている。

(8) 昭和16年8月の発掘

*発掘担当者は、直良信夫博士であった。

前年度発掘した吉田格博士とともに、「古代文化」に発表されている。

*発掘された場所は、斜面の道路付近である。

*貝層一上、下の二層に分かれ、上層は、約10cm、下層は、約30cm前後で、殆どシジミを主体とする貝層である。

*出土遺物一石匙、骨鏃、(鳥骨で、例がなく特殊なもの)

土器一円筒土器一下層式、上層式。

*自然遺物一脊椎動物一哺乳類 (ニホンシカ、鯨の一種、マイルカ、鳥類一キジ科の一種、無脊椎動物、軟体動物一ベンケイガイ、(少)、ヤマトシジミ、(多)、

*さらに、つぎのように説明されている。脊椎動物では、鳥獣のみであるが、陸獣は少なく、鯨類を多く捕獲していたこと、骨は、総て、叩き割られていた。軟体動物では陸水棲のシジミを多量にとっていた。

オセドウ貝塚人は、漁猟を中心とした生活で、その生活舞台は、陸よりもむしろ水面にあった。陸水では、シジミのような貝類を、海では、鯨類を捕獲することが得意であったようである。

しかし、全体的にみて、オセドウ貝塚人の生活は、あまり裕福でなく、日本本州の北辺の厳しい大自然の中にあって貧しい生活をよぎなくされたものと思う。と述べられている。

以上、簡単であるが、オセドウ貝塚遺跡の先学の研究について述べ、研究史の一端にふれてみた。

(参考文献—市浦村史 第一巻 豊島勝蔵著)

例 言

*この報告書は、平成元年11月29日より12月9日にわたって、市浦村教育委員会が実施した「オセドウ」貝塚発掘調査の記録である。

*この報告書のうち、遺構の実測、およびセクション図は、調査員永沢秀夫が担当した。
また、実測図のうち、Aグリットの実測は、市浦村役場建設課職員が担当した。

*その他、写真撮影、トレース等、一際は、新谷雄蔵が担当した。

*出土遺物の分類、サンプリングは、市浦村学芸員佐藤智雄が担当した。

*出土した遺物は、すべて、市浦村教育委員会が保管し、歴史民族資料館に展示して、学術研究の資料に資する。

*この遺跡は、青森県市浦村大字相内字露草190番地に所在する。

*本遺跡の発掘に際して、用具の運搬、および、庶務の一切は、市浦村教育委員会職員が担当した。

[オセドウ貝塚遠景]

写1

Ⓐ



(北西より)

Ⓑ



(北北西より写す)

Ⓒ 発掘メンバー記念写真 (御苦労さまでした!!)



①

☆Aグリットの表土剥ぎ状況



②



☆Aグリットの表土剥ぎ状況

③

☆Bグリットの精査状況



④

☆BグリットのI層から
II層へ掘りすすむ
(全員投入)

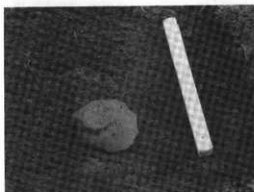


⑤

☆スコップから移植
ベラへかえて掘る。
(Bグリット)



⑥ 〔環形底部〕の出土状況



⑦ 〔土錘・土器・石器の出土状況〕



[Bグリットの状況]

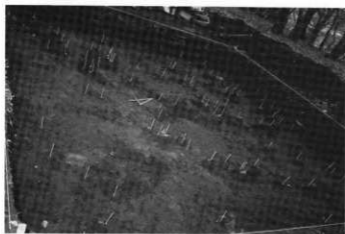
写4

⑧

☆BグリットⅡb層の剥ぎとり
と精査状況



⑨



☆BグリットⅡ層・Ⅱb層の遺
物の分布 (著で分布を示す)

⑩

☆BグリットⅢ層上面の精査状
況



[Bグリットの状況]

写5

⑪

☆BグリットⅡ・Ⅱb層の遺物の
分布状況



⑫



☆市浦教委職員もガンバル!!

⑬

☆市浦村建設課員の実測風景



⑭

☆AグリットⅡ層の遺物分布状況



⑮



☆AグリットⅡ層からⅡb層へ、
遺物の分布状況

⑯

☆同上、Ⅱ・Ⅱb層の遺物分布
の状況



[Bグリットの状況]

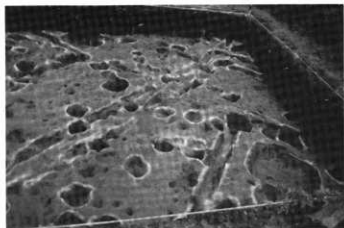
写7

⑬

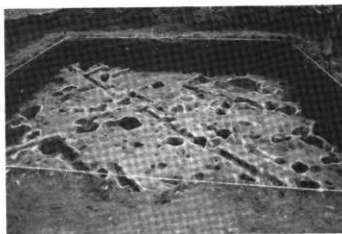
☆Bグリットの完掘状況

※住居址が5棟認められる。

(南西より写す)



⑭



☆Bグリット完掘状況
(写す方向を変えて)

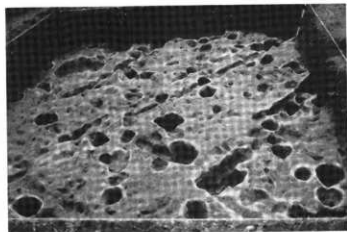
(北西より写す)

⑮

☆同上

※溝が4棟分認められ、柱穴の配置状況から1棟分の住居址が認められる。

(東南より写す)



[Aグリットの状況]

写8

⑳

☆Aグリットの完掘状況

※Aグリット東壁下検出の住居
址の一部(Ⅲ・Ⅲb)



(北方より写す)

㉑

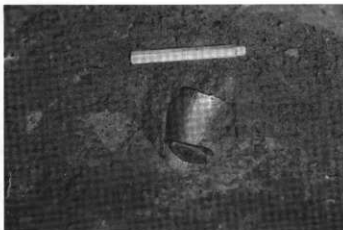


※中央に焼土堆が認められる。

(西南より写す)

㉒

☆AグリットⅢ層上面の土師器
出土状況

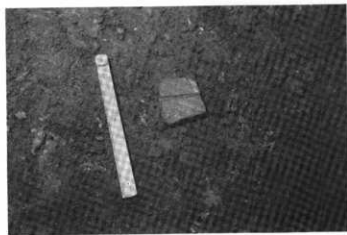


㉓

☆AグリットI層の石斧出土状況



㉔



☆AグリットII層上出土の砥石

㉕

☆AグリットI層出土の磁器



26

☆A グリットⅡ層出土の支脚



27



☆A グリットⅠ層出土の「環形」土師器

28

☆B グリットⅡ層出土の壺形土器

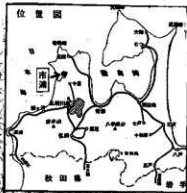


[第1図—A] 市浦村オセドウ貝塚付近地形図

(第一、第二次共用)

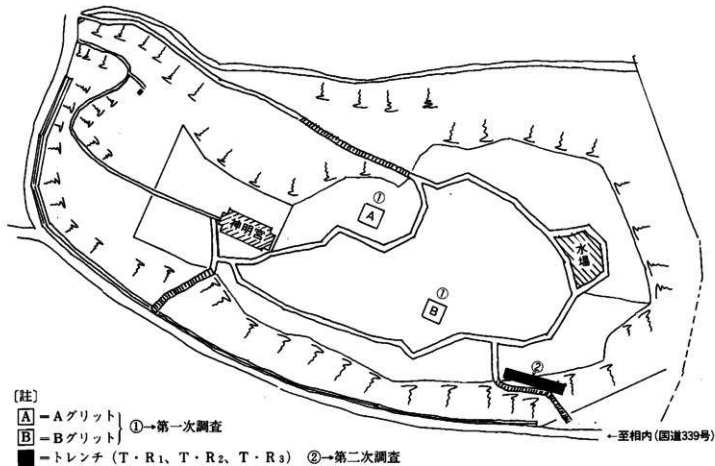
S 1
50,000

位置図



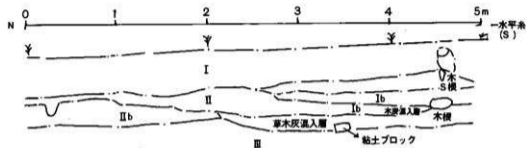
〔第1図-B〕 神明宮境内見取り図 S $\frac{1}{450}$

(オセドウ遺跡、オセドウ貝塚調査区)



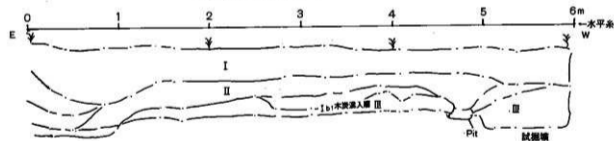
〔第2図-A〕 Aグリット東壁セクション図 S- $\frac{1}{20}$

B・M-19.117m
E・L-55.5cm
水糸L-116.0cm



〔第2図-B〕 Aグリット南壁セクション図 S- $\frac{1}{20}$

B・M-19.117m
E・L-55.5cm
水糸L-116.0cm

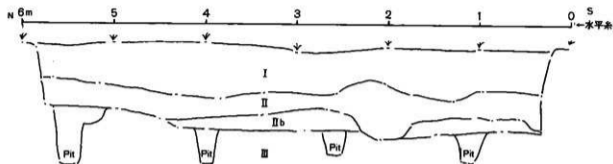


☆層序註記

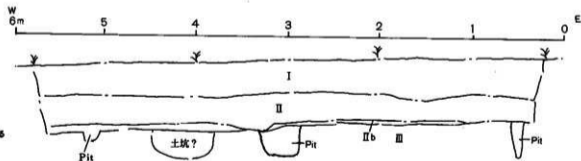
- I 黒褐色土
木炭様多数混入
粘土質で塑性あり、10cm位の小石の混入あり
焼土も混入
- Ib 黒褐色土
木炭様の混入割合少なくなり、やや明るい色となる
- II 茶褐色土
粘土の混入多くなり、粒子細かくしまっている。5m前後の木炭粒混入している
- III 灰褐色土 ローム層
粘土質に砂物混入、堅くしまっている
- I層の中に木炭混入あり
- 木炭灰混入層 灰色で灰の混入多し
焼土、木炭の小塊が混っている

〔第3図-A〕 Bグリット東壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$

$\left\{ \begin{array}{l} B \cdot M = 19.117m \\ E \cdot L = 130.65cm \\ \text{水系} L = 65.0m \end{array} \right\}$



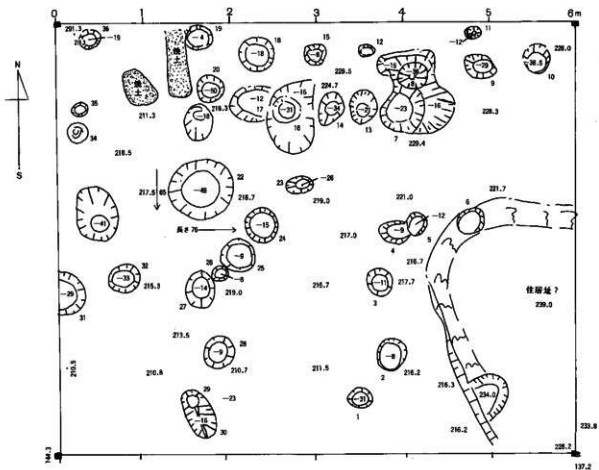
〔第3図-B〕 Bグリット北壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$



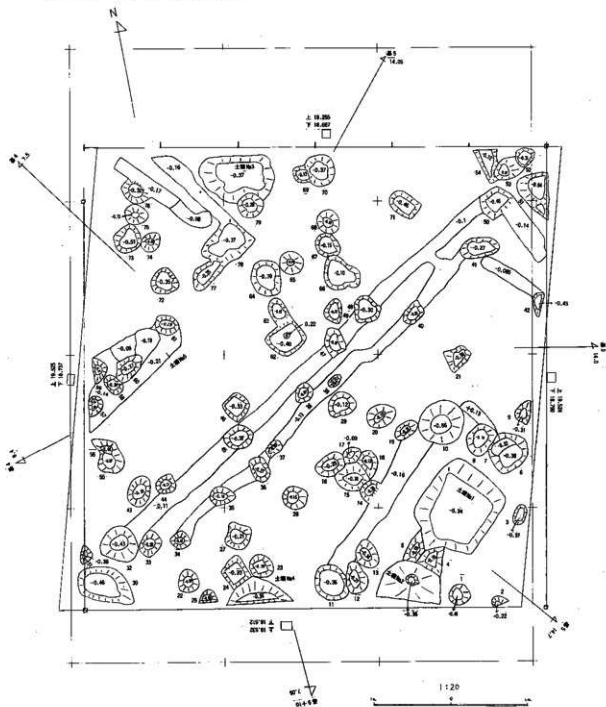
〔註 記〕

- I 黒褐色土
草木根流入多い
砂質で水はけ良好でさらさらしている
- II 褐色土
粒子のあらい砂質で水はけ良好
小石・鐵土・木炭片砂ブロックの流入がみられる
- IIb 茶褐色土 (薄砂層)
砂質の流入多く水はけ良好
粒子はあくぐざらざらしている
- III 砂質ローム
黄褐色土
粒子あくぐざらざらしておりもろい

[第4図] Aグリッド遺構平面図 $S = \frac{1}{20}$ { B・M=19.117m }
 { E・L=55.5cm }



[第5図] Bグリット遺構実測図



〔I〕発掘に至る経過と調査要項

(1) 発掘に至る経過

*青森県北津軽郡市浦村教育委員会は、オセドウ貝塚が所在する神明宮の境内に、史跡公園を造るため、アズマ屋および公衆トイレを建設することになった。その予定地を事前に発掘調査することにした。

このオセドウ貝塚の所在する神明宮境内は、考古学の研究史上重要な遺跡であることは、周知のことである。

以下に(2)調査要項、(3)発掘日誌に分けて述べる。

(2) 調査要項

*発掘主体者 市浦村教育委員会 代表 教育長 木村 義光

*調査担当者 日本考古学協会会員 新谷 雄蔵

*調査員 北奥文化研究会副会長 永沢 秀夫

*市浦村教育委員会

事務局員 鍋田 元

三浦 美智男

大沢 丈徳

*発掘面積 5×6m (Aグリット)、6×6m (Bグリット) 一計66平方メートル。

*発掘方法 グリット法による。

(3) 発掘日誌

*11月29日 発掘第一日、5×6m (Aグリット)、6×6 (Bグリット)を設定し、杭うちを行ない、直ちに第一層の荒掘りを行なう。

荒掘りは、Aグリットより行なう、この荒掘りでAグリットより土師器、須恵器、珠洲、羽口、鉄さい、獣骨が出土した。

*Aグリットの荒掘りを午前で終了、午後よりBグリットの荒掘りを行なう。

*12月1日 設計変更により、Aグリットの位置を変更する。神社の北側に、5×6m、(南北5m×東西6m)として設定する。

*Bグリットの荒掘りをほぼ完了する。このグリットの第一層より、石錘、珠洲焼、越前焼、須恵器、土師器、土錘が出土したが、土錘の出土数が目立っている。

*Aグリットの杭打ちと、縄張りを行なう。直ちに、荒掘りを行なう。

*12月2日(土) 発掘第三日

BグリットのI層よりII層へと掘り進む、サブ、トレンチを入れて、II層～III層の深さをつかむ。

*Bグリットの本日の出土遺物は、次のとおりである。

土錘、捺文土器、土師器、須恵器、珠洲焼、縄文式土器、(中期b式)、エンド、スクレーパー、石鏃。

これ等の遺物は、第I層から多量に出土する。

*12月4日(月) 曇

グリットAの荒掘り実施、グリットBは、午前で第III層の上面まで掘り下げる。午後は、全員でグリットBの掘り下げを行なう、グリットBは、第III層上面で住居跡の切り合いが認められる。

*出土遺物—土錘、須恵器、珠洲、土師器、鉄滓、羽口、エンドスクレーパー、壺形土器。

*12月5日(火) 曇、小雨

Bグリットの精査開始、住居跡2棟の切り合いが認められる。

Aグリットは、昨日に続いて荒掘り実施。

*出土遺物—土錘、珠洲、捺文土器、土師器、須恵器

*グリットBの南西隅で、住居跡の溝と、土坑を検出する。即ち、住居跡は、1号、2号、3号となった。

*また、柱穴(主柱穴)も検出される。柱穴の中には、内面に根石が入っているものもある。そのため、グリットAの作業を中止し、全員をBグリットの精査に投入する。

*セクション、ポジションは、東壁、及び、北壁とし、壁面を整理する。

*12月6日(水) 曇

*12月6日(水) 曇

*GHと床面のレベルを計測する。

*Bグリットの精査完了、住居跡は、1号～4号の4棟となる。(Bグリット)

*Aグリットは、I層を掘り下げ、午後よりII層の掘り下げにかかる。

—出土遺物—土錘、土師器、須恵器、珠洲、越前

*いままでの観察では、グリットA、Bの層序が異なるように観察される。

*12月7日(木) 晴

*B、Mの移動を行なう、即ち、B、M=19,117mを計る。

*グリットAは、II層を掘り下げる。柱穴を検出する。

*出土遺物—石錘、土錘、土師器、須恵器

*12月8日(金) 曇

*グリットAのIII・IV層を掘り下げる。住居跡を検出する。この住居跡を5号とする。

グリットBの精査にかかる。柱穴群を検出する。また、焼土も認められる。

*12月9日(土) 曇

*グリットAの西壁、南壁をセクションポジションとし、壁面を整理し、図面をとる。また、やり方測量によって住居跡と、柱穴の実測図を作成する。

記念写真をとり、用具や遺物を運搬し、後始末をして発掘を終了する。

本日も日本海と、十三湖から吹きつける北西風は強い。

〔Ⅱ〕地形、層序

(1) 地 形

「オセドウ貝塚」は、五所川原市の駅前より、小治行の弘南バスにて、約1時間、市浦村相内部落下車、国道339号に沿って相内村の南に、約30分進むと、小高い丘がある。

そこには、神明宮があるが、この神明宮の境内が、「オセドウ貝塚」である。

この小丘は、BM19.117メートルの独立峰で、北は、道路を隔てて水田が広がり、約2km北方には、有名な「山王坊」がある。また、南側は、国道339号に接しており、この道路を隔てて、十三湖が遠望できる地形である。

また、この丘の北約500mには、相内川が南流して十三湖に注いでいる。

(2) 基本層序

〈Aグリット、層序模式図〉

* Aグリットの層序

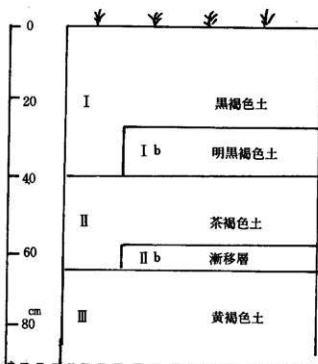
I 層—草木根多く、粘土質で湿性があり、1cm大の泥岩も混入、焼土の混入もある。

I b 層—草木根の混入が少なく、やや明るい色となっている。

II 層—茶褐色土、粘土の混入多くなり、粒子も細かく、しまっている、径5ミリ程の木炭粒が混入する。

II b 層—II 層からIII 層への漸移層である。

III 層—黄褐色土—粘土質ロームで、砂粒が混入し、固くしまっている。



* Bグリットの層序

I層—黒褐色土—草木根の混入多く、粒子の細かい砂質土で、湿性がなく、さらさらした層である。

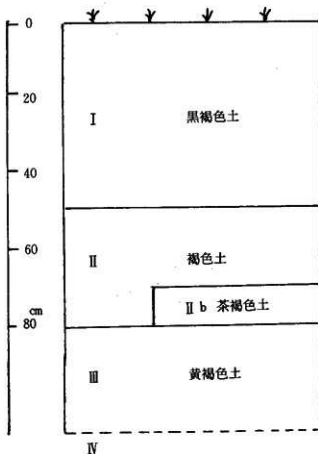
II層—褐色土—粒子の荒い砂質土で、湿性がなく、小石、焼土、木炭片、及び、砂ブロックの混入がある。

II b層—茶褐色土—砂粒の混入が多く、湿性がなく、ざらざらしている。

III層—黄褐色土—粒子が荒く砂質で、ざらざらしている。

* A、Bグリットとも、次の、(IV層)が、黄褐色ロームで遺跡のある小丘のベースである。

<Bグリット層序模式図>



〔Ⅲ〕検出遺構

(1) Aグリット(第4図)

このAグリットで検出した遺構は、次のとおりである。

1) 住居跡—1基、2) 土坑—2基、3) 柱穴—36、焼土—2か所、以上の各遺構である。これらについて、1～4の順に簡単に述べる。

*住居跡—この5号とした住居跡は、Aグリットの南東隅で、円形プランの一部を検出した。確認した層位は、第Ⅱ層下位である。(隅丸方形の可能性もある。)

検出したのは、一部分であるが、その形状からみて、多分、円形のプランをなすものであろう。住居跡の壁面は、ゆるい傾斜をなすもので、壁面下には、溝はないものである。

この住居跡に伴うと思われる、ピット6と、住居跡の南、即ち、南壁下には、浅い落ち込みがあったが、その性格は、不明である。また、この住居跡に伴う柱穴も不明である。

*この住居跡の床面では、木炭混入層が、約15センチメートルの厚さで堆積していたが、床面での出土遺物がないので、その年代は不明であるが、土師器や須恵器使用の年代ではなく、そのプランからみて、縄文時代のものと思われる。

*土坑—検出した2基の土坑には、それぞれ、柱穴が、2こ、1こ、伴っていた。この土坑内には、遺物が検出されず、やはり年代は不明である。

*柱穴群—柱穴は、大小36こを検出した。このうち、pit22、33としたものは、土坑とも言えるものであるが、その性格、機能は不明である。

(2) Bグリット(第5図)

このBグリットで検出した遺構は、次のとおりである。

1) 住居跡—4基、2) 土坑—5基、3) 柱穴—78こ

これらの検出した遺構について、1)～3)の順に簡単に述べる。なお、住居跡については、1号～4号として述べることにする。

(1) 1号住居跡

この1号住居跡は、第Ⅱ層下面で褐色土の溝状の落ち込みによって確認したものである。この住居跡の一部と思われる溝状遺構は、Bグリットの対角線の南側にあつて、溝の幅は、約20cm、深さは、約8.5cm～13cmと計測された。

溝は、pit41で、右折しているが、約1m程東南に伸びて中断している。また、溝の南西部の端には、pit34があつて、このpit34で、溝そのものは中断しているものである。

即ち、pit42、41、40、39、37、36～34にわたる溝状遺構に囲まれた住居跡を第1号住居跡とした。

この住居跡の床面は、破壊されており平坦ではないが、一応住居跡とした。

*出土遺物—この住居跡第Ⅱ層下面、即ち、覆土中より土師器、擦文土器、須恵器、珠洲焼、土錘等が出土した。

この出土遺物や、方形と推定されるプラン等から平安時代後半の住居跡と思われるが断定は控える。

(2) 2号住居跡

この2号とした住居跡も、1号住居跡と同様、第Ⅱ層下、即ち、第Ⅲ層上で、前者と一緒に検出されたものである。

この住居跡と思われるものも、溝状遺構として検出されたものである。即ち、第5図に示すとおり、その溝は、Bグリットの北東隅から、南西隅に伸びるところの対角線をなすもので、北東から、pit50、48、47、45、32、30をつなぐ溝状遺構で、1号住居跡の溝と平行するものである。

*この溝は、幅約20～28cm、深さ約10～14cmである。また、先に述べたpitは、この住居跡に伴う柱穴と思われる。

この住居跡は、溝とそれに伴う柱穴のみであるが、この溝の南西端は、pit30で、グリットの壁面下に伸びており、北東部は、第1号住居跡と同様、pit50で南西に曲がり、壁面に接している。そのため、全体のプランは不明であるが、一応、方形の住居跡と思われる。

*第1号住居跡と、第2号住居跡の新、旧については、判断が難しいが、第1号は、溝が中断したり、削平されている点を考慮に入れると、第2号の住居跡が新しいと思われる。

しかし、断定できない。また、年代については、両者に大きな差はないように思われる。一応、平安時代後半と推定した。

(3) 3号住居跡

この住居跡も、第2号住居跡と同じ層位で検出したものである。即ち、第Ⅱ層下、Ⅲ層上面である。この3号住居跡は、Bグリットの南東隅で、その一部を検出したものであるが、pit10からpit11につながる溝と、pit 7、8、及びpit11、12、13、の一群の遺構である。このものを、方形プランの一部と判断して、第3号住居跡と判断した。

*第1号土坑、一この、第3号住居跡の中には、第1号土坑（方形）と、第2号土坑（円形）が存在する。

また、pit11、10、6、7は、3号住居跡に伴う柱穴と思われる。

*第1号土坑は、長径約120cm、短径約95cm、深さ約34cmである。しかし、用途、性格、及び第3号住居跡との関連は不明である。

この土坑の年代は、第2、第3号住居跡よりも新しいものと思われる。そのことは、第2号住居跡の床面を切っているからである。

(4) 4号住居跡

この住居跡は、(1)～(3)の住居跡と同様、第3層上面で検出したものである。

この住居跡は、Bグリットの北西隅で検出した。この住居跡も溝状の遺構で検出したもので、一部削りとられているが、第5図に示したとおり、方形プランの一部と考えられる。溝の一部は、第5号土こうと接続している。

*出土遺物は、第Ⅱ層下面から、(1)～(3)の住居跡と同様、第2形式（桜井）の土師器、擦文土器及び須恵器が出土しているので、その年代は、やはり平安時代後半のものと考えられるが、断定は控えたい。

☆柱穴群について

pit22、27、28、16、20、21は、北東より南西に一直線に並んでいる。このことから、第2号住居跡に伴うものか、或いは、未だ検出されない遺構に関係するものか、目下のところ不明である。

***土坑について**

土坑は、Aグリットで、1号と2号の2基を検出した。しかし、5×6mの狭いグリットでは、その性格、機能等は、不明である。

また、Aグリットでは、Aグリットの西南壁下で1号、2号とした焼土の広がり認めしたが、pit（柱穴）と同様、性格、機能等は不明である。

*Aグリットでは、土坑が全部で、1～5号の5基を検出したが、1、2号については既に述べてあるので省略するが、3号は、Bグリットの北西壁面下にあり、4号は、Bグリットの南西壁面下に所在するが南壁によって切られている。

また、5号とした土坑は、溝状のプランのもので西壁下に伸びるものであるが、これらの土坑については、不明である。(性格、機能、及び、住居跡との関係等)

*さらに、柱穴群を観察すると、Aグリットでは、円形プランの柱穴で、Bグリットでは、円形のもの、方形、または、不整形の柱穴が認められる。即ち、前者は、縄文時代、後者は、土師器、須恵器使用時代のものとも考えられるが断定は控えたいと思う。

1989. 11. 29~12. 09		オセドウ貝塚出土、遺物分類表 (表1)			推定年代			
(1) 縄文式土器		<ul style="list-style-type: none"> ・前期 P・L1→ (4・20・22・24) ・中期 P・L1→ (1・3・5・7・14・16・18・19・21・23) ・後期 P・L1→ (8・13・17) <li style="padding-left: 20px;">P・L2→ (1~8・10~32) ・晩期 P・L2→ (9) <li style="padding-left: 20px;">P・L5→ (4) 			(縄文時代) ・前期 6000 └──┬──┘ ・中期 5000 └──┬──┘ ・後期 4000 └──┬──┘ ・晩期 3000 └──┘ 2000			
(2) 土師器	・環形	<ul style="list-style-type: none"> ・A・P・L3→ (3) ・A・P・L4→ (4) ・P・L4→ (1~27) ・P・L5→ (1~3, 5~14) ・P・L6→ (14~24) ・P・L7→ (1~24) ・P・L8→ (1~23) ・P・L10→ (1~12) 	土師系土器 (12世紀以降)	壺形	<ul style="list-style-type: none"> ・A・P・L1→ (1) 	(平安時代) ・10世紀~11世紀		
	・壺形	<ul style="list-style-type: none"> ・P・L10→ (13~20) ・P・L11→ (1~24) ・P・L12→ (1~8) ・P・L13→ (1~19) ・P・L14→ (1~15) ・P・L15→ (1~21, 23~32) ・P・L16→ (5・10~12) 		鉢形	<ul style="list-style-type: none"> ・A・P・L2→ (2) ・A・P・L5→ (5) 			
(3) 推文土器		<ul style="list-style-type: none"> ・底部 P・L16→ (1~3, 6~9・13) ・口縁部 <ul style="list-style-type: none"> ・P・L1→ (2) ・P・L17→ (1~14) ・P・L18→ (1~26) 			・9世紀末~11世紀末			
(4) 陶磁器		<ul style="list-style-type: none"> ・須恵器 <ul style="list-style-type: none"> ・P・L20→ (1~6, 14~20) ・P・L21→ (1~5, 7~9・10~15・17・19) ・珠洲 <ul style="list-style-type: none"> ・P・L20→ (21) ・P・L19→ (3・5) ・越前 <ul style="list-style-type: none"> ・P・L19→ (7) ・青磁 <ul style="list-style-type: none"> ・P・L19→ (1・2) ・産地不詳 <ul style="list-style-type: none"> ・P・L19→ (6) ・P・L19→ (8~10) 			<ul style="list-style-type: none"> ・10世紀~11世紀 ・15世紀~16世紀 ・15世紀~16世紀 ・15世紀~16世紀 ・17世紀以降 			
		(5) 支脚~羽口		<ul style="list-style-type: none"> ・S・P・L2→ (1・15) ・S・P・L2→ (2~8, 9~14) 			・10世紀~11世紀	
		(6) 土 鍋		<ul style="list-style-type: none"> ・P・L3→ (1~17) ・P・L9→ (1~55) 			・縄文~土師器使用時代	
		(7) 鉄製品		<ul style="list-style-type: none"> ・P・L6→ (1~13) ・P・L19→ (4) ・S・P・L1→ (16~18) 			・10世紀~16世紀	
		(8) 石器~浮石		<ul style="list-style-type: none"> ・S・P・L1→ (1・2・4~9, 13~15, 3) ・S・P・L1→ (10・11・12) ……浮石 ・S・P・L2→ (16~24) <li style="padding-left: 20px;">(25) →木炭 			・縄文時代	

☆考古学辞典 (参考)

オセドウ貝塚出土骨類調査表

〔表2〕

調査者 金子 浩昌

オ セ ド ウ 貝 塚	1	A' I 上	イヌ 左大腿骨遠位部	<ul style="list-style-type: none"> • A' グリット1層上面(約5cm)で検出するも、ほぼ表面採集に近い状態であった。 • 1~9は、6×6mグリットの中央部に点在していた。 • これらのイヌ・ウマはオセドウ貝塚に近い場所での出土とされるが縄文期のもとの認定できる程の特徴をもっていなかった。
	2	◇	イヌ 右肩甲骨片	◇
	3	◇	イヌ 右上腕骨遠位部	◇
	4	◇	イヌ 左脛骨遠位部	◇
	5	◇	イヌ 右尺骨片	◇
	6	◇	イヌ 左大腿骨近位部	◇
	7	◇	イヌ 右下顎骨	◇
	8	◇	イヌ 左下顎骨	◇
	9	◇	ウマ 中足骨	◇

〔Ⅳ〕出土遺物

☆オセドウ貝塚の発掘において出土した遺物は、次の通りである。

- 1)、縄文土器
- 2)、土師器
- 3)、擦文土器
- 4)、陶磁器
- 5)、支脚～羽口
- 6)、土錘
- 7)、鉄製品
- 8)、石器～浮石

大別すると、以上の8項目となるが、土師器は、さらに、A、土師器、B、土師系土器の2種に分類される。以下、簡単に解説することにした。

(1)、縄文土器

出土した縄文土器は、前期の土器、中期の土器、後期の土器、晩期の土器に分けられる。このうち、前期の土器は、破片のため、型式名は、不明である。(6000～5000)、中期の土器は、型式名が不明な破片と円筒上層式b類も含まれる。(5000～4000)、後期の土器は、後期初頭の「十腰内1式」土器が含まれている。この後期の土器は、出土した縄文式土器の中では、最も多く出土している。(4000～3000)、晩期の土器は、わずかに、2点の出土で、多分まぎれこんだものであろう。(3000～2000)、以上が出土した縄文土器である。

(2)、石器、浮石

このものは、S・P・L1-1～15、S・P・L2-16～24に示した石器、及びS・P・L1-10～12に示した浮石であるが、これらのものは、縄文時代のものようである。即ち、本遺跡で出土量が多い縄文時代の後期、「十腰内1式」の可能性が高いと思う。

以上、今回の発掘で出土した遺物について、簡単であるが、分類してその年代を含めて概要を述べた。

*参考文献(省略)

(3)、土師器一(A)

出土した土師器は、器形で分けると、杯形、甕形の二種にわけられる。

いずれも破片であるが、これらの土師器は、「東北、北部の土師器型式」第二型式のもので、平安時代後半以降のものである。

土師器一(B)

土師器一Bとしたものは、「土師系土器」として分類したものである。これらの土器は、類例がなく、筆者にとっても初見のものである。一応、「土師系土器」としたが、出土層は、BグリットのⅠ・Ⅱ層であるから、土師器よりも新しいものと思われる。即ち、胎土や焼成、及び器形等から12世紀以降、中世のものと考えられる。

(4)、陶磁器

この陶器、磁器は a 須恵器、b 珠洲、c 越前、d 青磁、及び、e 産地不詳にわけられる。以下、a～eの順に簡単にのべる。

a、須恵器

このものは、長頸（細口）壺と、変形の二器種に分けられる。

これらの須恵器は、「前田野目窯跡」または、「持子沢窯跡」出土のものと同様のもので、ほぼ、10世紀～11世紀のものであろう。

b、珠洲

このものは、P・L19～P・L21に示したとおり、播鉢、甕などに分けられる。

*津軽半島の西部では、古いもので、12世紀頃の珠洲焼が採集されているが、掲示したものは、15～16世紀のものうち、新しいものと思われる。

c、越前

このものは、P・L19-7に示したように、僅か1片の出土である。破片のため器形が不明であるが、変形と思われる。

*このものの年代は、16世紀のものと思われる。

d、青磁

このものは、僅か2片の出土で、P・L19-1、2に示してあるが、15世紀～16世紀のもので新しい年代のものらしい。

e 産地不詳の陶器

このものは、P・L19-6、8～10に示してあるが、新しいもので、17世紀以降のものと思われる。

(5) 支脚、羽口

このものは、S・P・L2-1、2～8、9～14、15に示したように破片のため、両者の分類は、困難であったが、一応分類してみた。

*これらのものの年代は、土師器と同様、10世紀～11世紀のものであろう。

(6) 捺文土器

捺文土器は、口縁部と底部が出土した、口縁部には、横走る沈線文のあるもの、縦走る捺文のあるもの、口唇部に1条の沈線文のあるもの、及び土器の内面のみに捺文があるものにわけられる。

これらのものは、すべて変形であるが、その底部は、P・L16に示すように底面の直上がしまっているのが、その特徴である。(9～11世紀末)

*捺文土器は、北上して来た土師器文化と北海道の土着土器とが影響して化成した土器とされているものであって、オセドウ貝塚と北海道との交流が認められるところである。

(7) 土錘

このものの出土は、きわめて多い、P・L3-1～17、P・L9-1～55に示したように、72個の出土である。即ち、5×6、6×6、計66平方メートルの発掘面積で、この出土数では、きわめて多量の出土とすることができる。

*このことは、昭和15年に、オセドウ貝塚を発掘された吉田格博士は、「オセドウ貝塚は、漁猟を中心とした生活で、その生活舞台は陸よりもむしろ水面にあったと述べているが、今回の発掘でも同じ感想がある。

(8) 鉄製品

このものは、P・L6-1～13、P・L19-4、S・P・L1～16～18に示したとおり、全部で17個の出土である。

これらの、鉄製品は、サビのため形は不明であるが、いままで述べてきた、(2)～(4)とした土師器～陶磁器と年代的には同様であらう。

[考 察]

1) 発掘したグリットは、神明宮の西南約10mの位置に、南北5m、東西6mのグリットを設定し、Aグリットとした。また、同じく、神明宮の後方約30mの地点に、東西6m、南北6mのグリットを設定して、発掘を開始したのであるが、Aグリットは、神社の本殿に近すぎるため、設計を変更して、神社の後方北側10mに変更して、Aグリットとし、最初に設定したAグリットは発掘しないことにしたのである。

2) 検出した遺構は、既に述べたように、(1) 住居跡一五棟、(2) 土坑一七基、及び、柱穴群である。

*発掘面積、66平方メートルの広さでは、極めて遺構の密度が大きいものと考えられるところである。

しかし、Aグリット、5m×6m、Bグリット、6m×6mの発掘面積では、既に述べた「住居跡」としたものの、即ち、Aグリットで1棟、Bグリットで4棟の住居跡としたものは、「溝」と、「柱穴」の配置から推察したものであって断定は控えたいと考えているところである。

ただし、土坑については、性格、機能等は別にして、土坑であることは間違いないと考えている。

柱穴について述べると、既に、述べたとおり、住居跡に伴うもの及び、土坑に伴うもの、まだ、検出されないグリット外の遺構に伴う可能性のあるもの等に分けられよう。

3) 出土遺物について

出土した遺物を大別すると、「表1」のようになるが、再び述べると下記のとおりである。

1) 縄文土器、2) 土師器、3) 土師系土器、4) 埴土土器、5) 陶磁器、6) 支脚～羽口、7) 土錘、8) 鉄製品、9) 石器、10) 浮石製品

以上のように分けられる。

*以下、簡単に出土遺物について述べる。

*縄文土器は、前期、中期、後期、晩期の各期に分けられるが、此のうち、縄文時代後期

のものが多く出土した。即ち、縄文時代後期「十腰内1式」土器が多く、他の各期は、極めて少ない。

*土師器は、当地方で一般的に出土する。杯形、壘形で、「東北、北部の土師器型式」第二型式の新しいもので、平安時代後半のものと考えられる。なお、杯形の中に、「燈明皿」が1個出土した。

*土師系土器としたものは、全部で3個出土した。そのうち1個は、昔使ったランプの油を入れるガラスの容器に類似した器形で、底面には糸切り痕があるものである。

(A・P・L1参照)、このものは、器形、胎土、焼成、共に今のところ類例が無いものである。類例を待ってさらに考えたい。但し、このものは、土師器と同じ層から出土しているので、平安時代後半～中世と幅広く年代を示しておくことにする。

*いま一つは、A・P・L2に示したように、鉢形土器である。一見して縄文土器と見えるが、器面の整形にケズリの手法が認められるもので、年代は前者と同様であろうか、このものも類例を待って考えたい。この両者は、少なくとも西北両郡では出土が無いものである。

いま、1個はミニチュアのもので、(A・P・L5)一応鉢形とした。このものは、やはり土師系のものであろう。

☆擦文土器

このものは、土師器に次いで多く出土した。擦文土器としては、新しいものであって、出土した土師器と年代は同じものであろう。

土師器の影響が極めて強く、その制作技法に現われている。

*陶磁器—この中には、分類すると、(表1)に示したとおり、{須恵器、珠洲、越前、青磁、及び産地不詳陶器}にわけられる。

これらのものについては、その年代についてのみ示すことにする。即ち、須恵器—10～11世紀、珠洲—15～16世紀、越前—15～16世紀、青磁—15～16世紀、産地不詳陶器—17～19世紀以降、(推定年代)

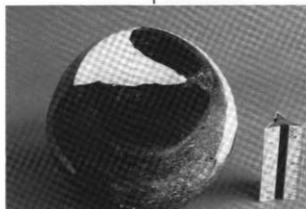
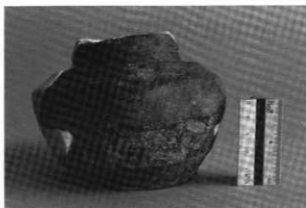
*支脚、羽口、鉄製品—10～11世紀及び16世紀、石器、浮石製品—縄文時代

*土錘—このものは、全部で72個の出土である。このものの年代は、縄文時代～土師器使用の時代(平安時代)、及び15～16世紀にわたるものであろう。

しかし、出土数が極めて多い点に注意したいと思う。

①

BⅡ下

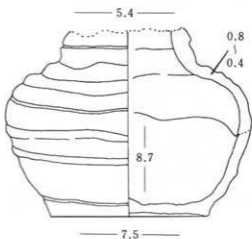


〔壺形土器〕－①

☆ ①は、BグリットⅡ層下より出土した「土師器系」の壺形土器である。

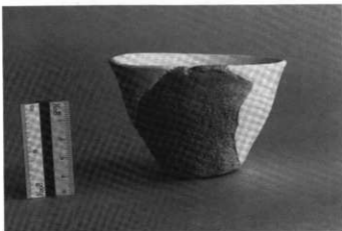
- 器形は、口縁部が欠失しているが、頸部は内傾するものらしい。肩部は、段をもって張り、底部直上がしばまる器形で、底面径は大きいものである。
- 施文はないが「ロクロ」の回転による整形痕が認められる。そのため、器表面は、段をなしている。また「ナデ」方向は横方向と認められる。底面には「回転糸切り」痕がある。器内面を観察すると、肩部下と胴上部の接合痕が認められ「外接」している。
- 色調は、褐灰色を呈し、胎土・焼成も良く、堅緻である。

(図上復原)

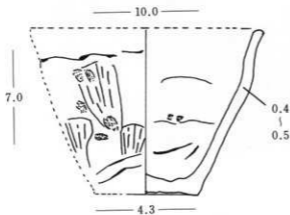


②

BⅡ下



(図上復原)



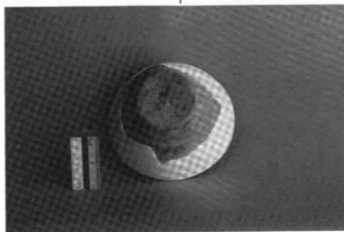
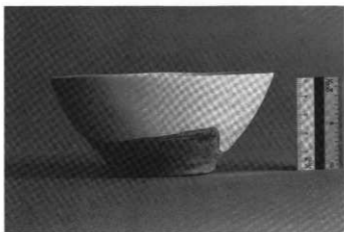
〔土師器—坏形〕—②

☆ ② は、BグリットⅡ層下出土の土師器坏形土器である。

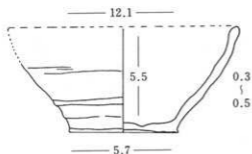
- このものの器形は、口頸部がゆるく外反し、肩部がふくらみ、胴下半がしぼまるもので、底面は、平底に近いものである。
- 無文の土器で、頸部は、横方向に「ナデ」られて平滑面をなしているが、胴部は、「へら」切り手法が認められるが、風化のためか器表面は、ボロボロしている。
- 色調は、暗灰褐色を呈し、胎土に細砂を含むが、焼成が良く、堅緻である。

③

AⅡ下



〔土師器一坏形〕—③
(図上復原)

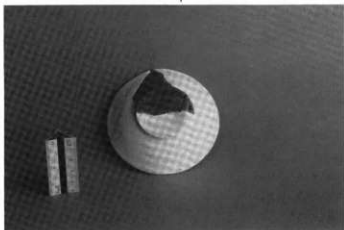
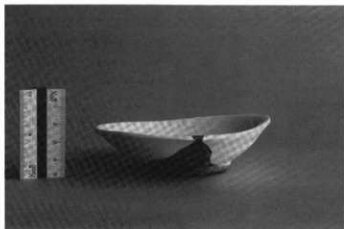


☆ ③ は、AグリットⅡ層下出土の「土師器一坏形」土器である。

- このものは、現存約3弱しかないので多少無理をして復原した。そのため、口縁～胴上半は不明であるが、胴下半では、「回転ロクロ」による「水引き痕」が認められる。また、底面には、回転糸切り痕がある。器形は、当地域で出土する一般的なものである。
- 色調は、明黄褐色で、胎土・焼成とも最良である。

④

BⅡ下



〔土師器一坏形〕－④

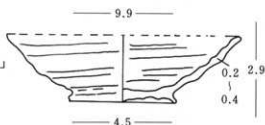
(図上復原)

☆ ④ としてのものは、BグリットⅡ層下出土の「土師器一坏形」土器である。(現存も)

- このものの器形は、口縁直下が外反するもので、器高が低く、浅い。底面は、「ヘラ切り」痕を認めるものである。

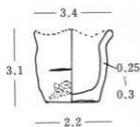
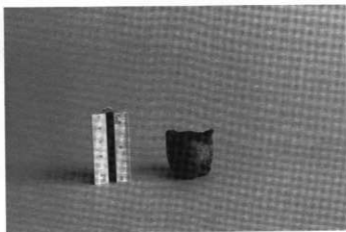
また、器内外面とも、「回転ロクロ」による「水引き痕」を認めるものである。

- 色調は、外面赤褐色、内面上半黒色、下半赤褐色で、胎土・焼成は良い。



⑤

B I



[土師系一小形鉢] - ⑤

☆ ⑤ としたものは、BグリットI層の出土で、[土師系一小形鉢]である。

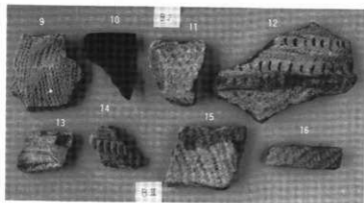
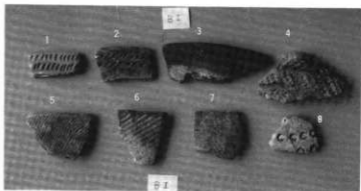
- このものは、実測図に示すとおり小形のもので、口縁が「くの字」状に外反する器形で、胴部は、わずかにふくらみ、底面は、平底に近いものである。
- 無文土器であるが、底面には、縦方向の沈線が圧痕として認められる。なお、このものは、「手づくね」によって造られている。
- 色調は、灰黒褐色で、内面は、灰黒色を呈し、胎土・焼成ともやや良い。

〔縄文式土器〕 その1

P・L₁

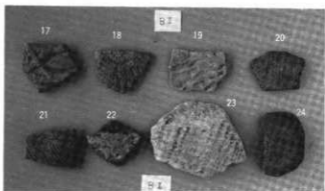
(1～24)

- (4) →前期の土器
 (1・3・5～7) →中期の土器
 (2) →擦文土器
 (8) →後期の土器



- (9～12) →中期の土器
 (13) →後期の土器
 (14～16) →中期の土器

- (20・22・24) →前期の土器
 (18) →中期末の土器
 (19・21・23) →中期の土器
 (17) →後期の土器



☆写真内のカード→㊦ B I・B II→Bグリット I・II層出土の意 (以下も同じ)

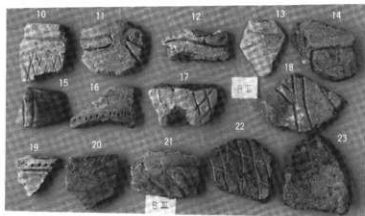
〔縄文式土器〕 その2

P・L 2

(1~32)

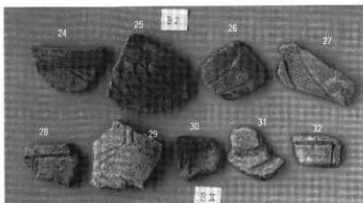
(1~8) →後期の土器
(十腰内Ⅰ式)

(9) →晩期の土器
(大洞C2式)

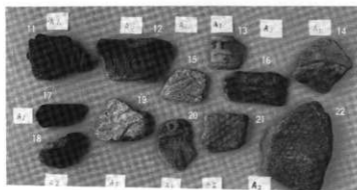
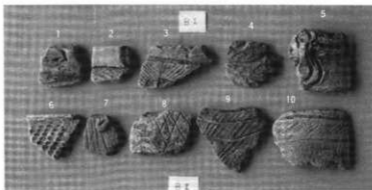


(10~15・17・18・20~23)
→後期の土器 (十腰内Ⅰ式)
(16・19) →後期の土器
(十腰内Ⅱ式?)

(24~32) →後期の土器
(十腰内Ⅰ式)



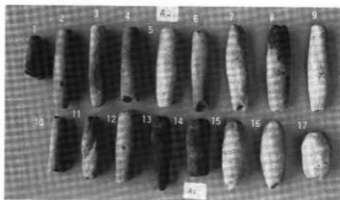
(1～10) →後期の土器
(十腰内I式)



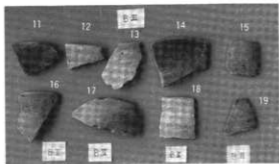
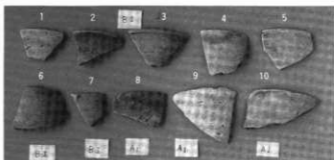
(11～20) →後期の土器
(十腰内I式)
(21・22) →土器底部
(十腰内I式)



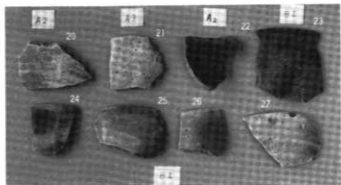
〔土 錘〕 その1
(1～17)



☆坏形→(1~27)→破片



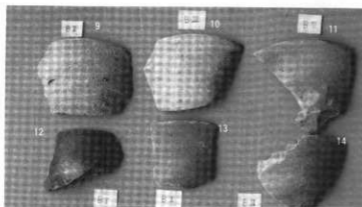
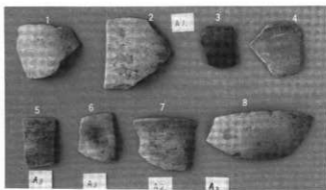
☆ (22) は、内黒の例である。



(1～3) →坏形

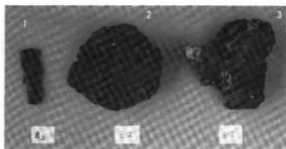
(4) →縄文土器
(大洞C 2 式)

(5～8) →坏形

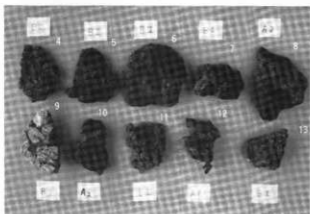


(9～14) →坏形

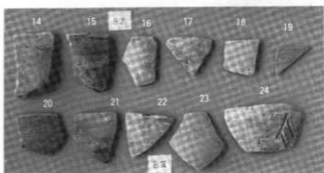
(1～3) →鉄器



(4～13) →鉄器



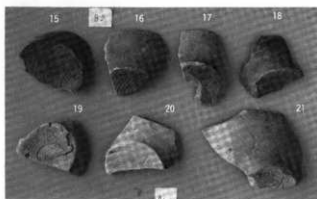
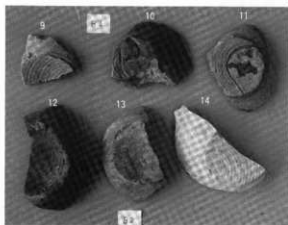
(14～24) →土師器 (坏形)



☆写真内のカード→ⓐAⅠ・AⅡ→AグリットⅠ・Ⅱ層出土の意 (以下も同じ)

[土師器—坏形底部]
(1~21)

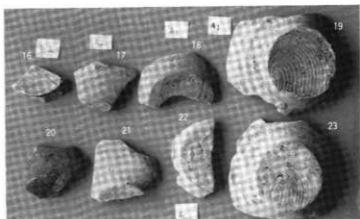
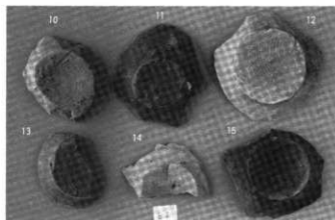
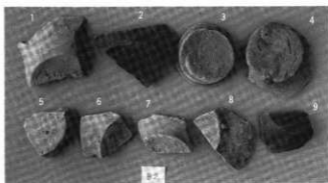
P·L7



100

[土師器—坏形底部]
(1~23)

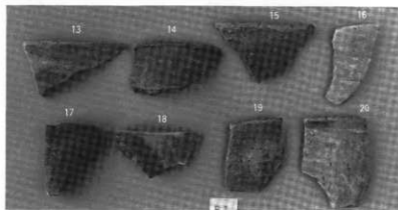
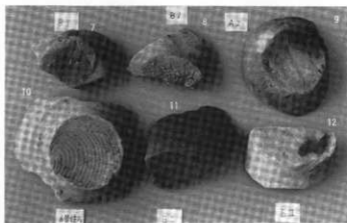
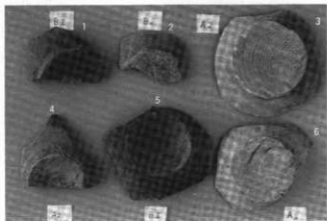
P·L 8

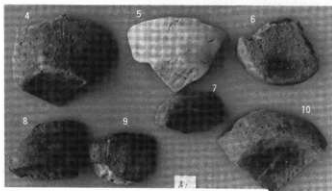
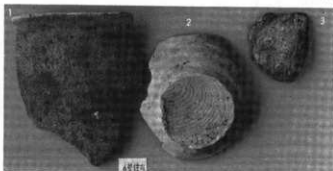


[土 錘] —その2
(1~55)

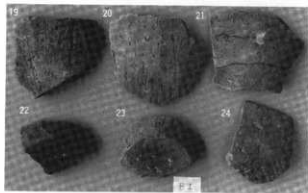
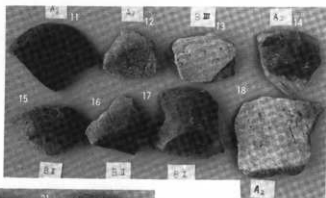
P・L 9

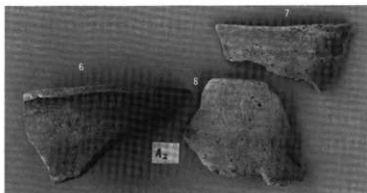
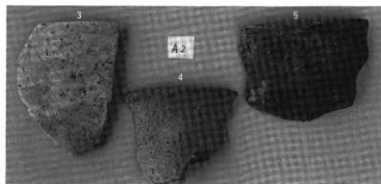
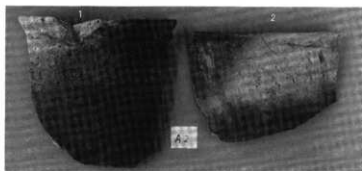


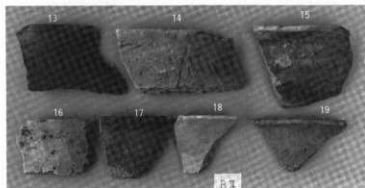
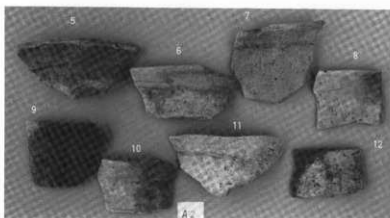


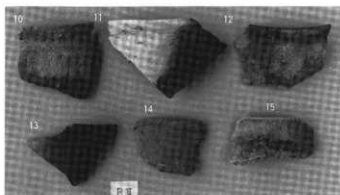
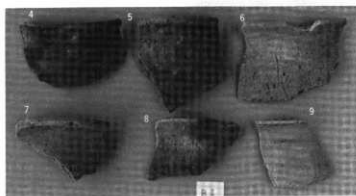
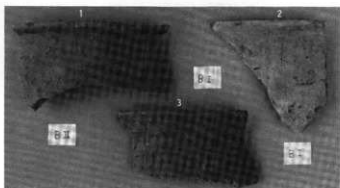


↖ 坏



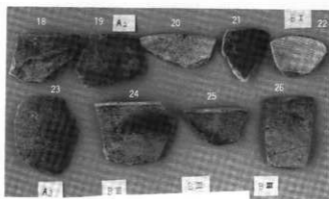
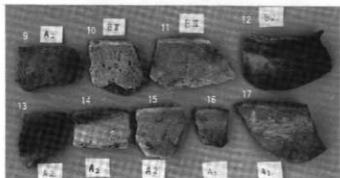
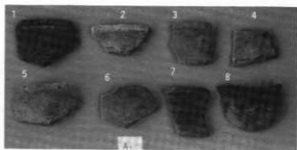




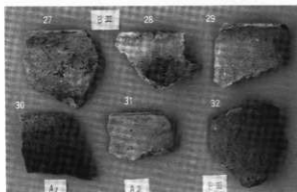


〔土師器一斐〕

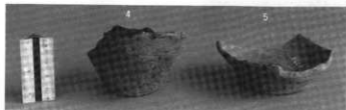
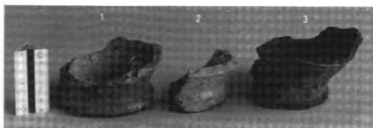
P・L15



← (22) は内面



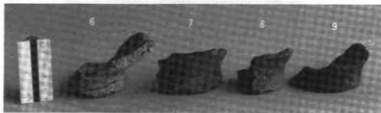
☆ (1～3) → 擦文土器



☆ (4) → A・P・L 2 (2) 参照

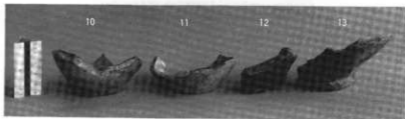
☆ (5) → 土師器

☆ (6～9) → 擦文土器



☆ (13) → 擦文土器

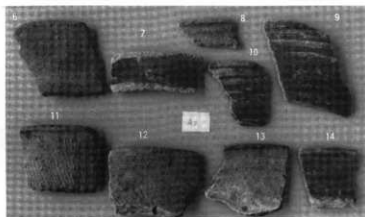
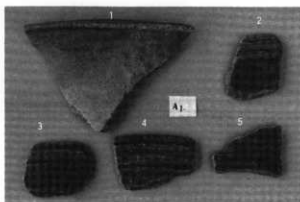
☆ (10～12) → 土師器



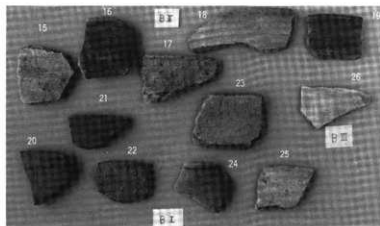
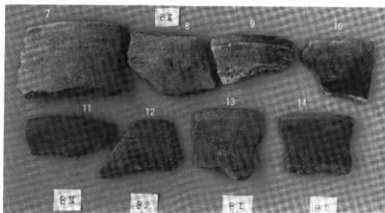
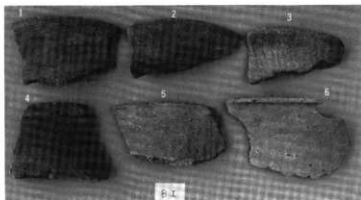
〔擦文土器一瓖〕

P・L17

☆ (1~14) → 擦文土器



☆ (1~26) → 擦文土器

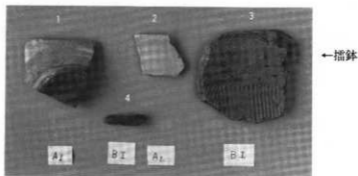


(26) 一内面に擦文あり

(12・19・2・5・6)

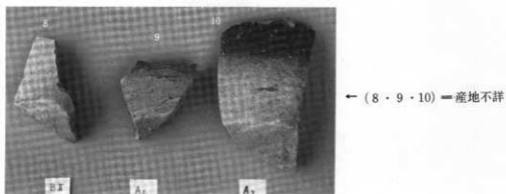
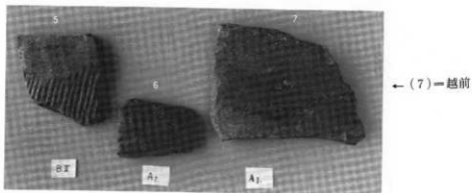
→ 口唇部沈線





(5) 珠洲 →

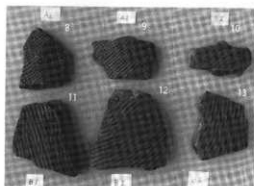
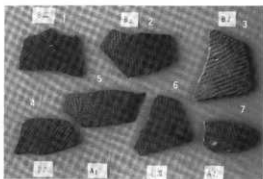
(6) → 産地不詳



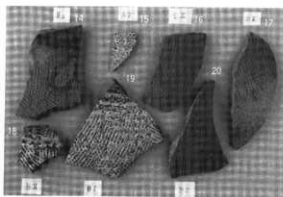
[須恵器・珠洲]

P・L20

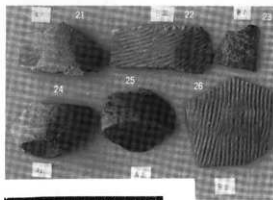
☆ (1~7) → 須恵器



☆ (8~13) → 須恵器



☆ (14~20) → 須恵器



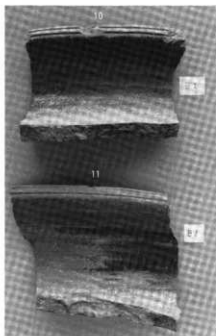
(21) → 珠洲
(22~26) → 須恵器

0 5 10 15

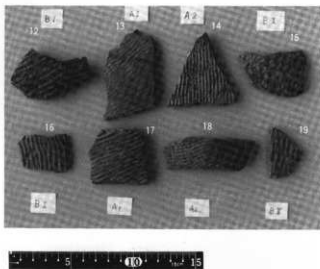
☆ (1~9) → 須恵器



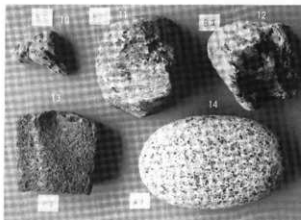
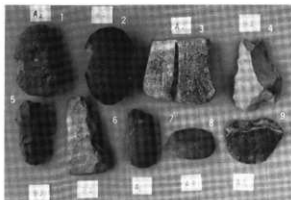
☆ (10・11) → 須恵器



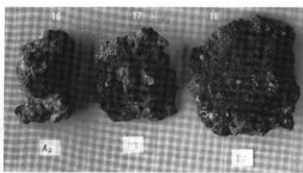
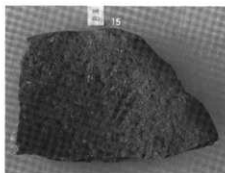
☆ (12~19) → 須恵器



- (1・2) —石錘
- (4・5・6) —播器
- (7・8) —石斧
- (3) —砥石
- (9) —スクレーパー

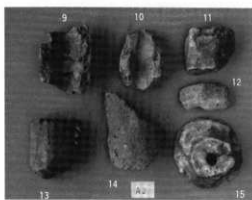
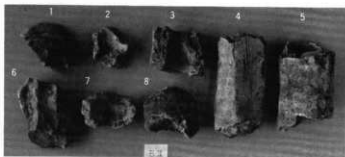


- ☆ (10・11・12) —浮石製品
- ☆ (14) —タタキ石
- ☆ (13・15) —石皿
- ☆ (16~18) —鉄製品



- | | | |
|-----------|-------------|-------------|
| (1) 凝灰岩 | (6) 頁岩 | (11) 浮石質凝灰岩 |
| (2) 珪質頁岩 | (7) 千枚岩 | (12) 浮石質凝灰岩 |
| (3) 粗粒凝灰岩 | (8) 砂岩 | (13) 粗粒凝灰岩 |
| (4) 珪質頁岩 | (9) 玉髓 | (14) 黒雲母花崗岩 |
| (5) 珪質頁岩 | (10) 浮石質凝灰岩 | (15) 火山礫凝灰岩 |

☆ { 1 一 支脚
2~8 = 支脚 or 羽口 }



(支脚 or 羽口)

- (9~14)
- (15) 一 支脚



- (16) 珪質頁岩
- (17) 珪質頁岩
- (18) 頁岩
- (19) 珪質頁岩
- (20) 珪質頁岩
- (21) 黒曜石
- (22) 玉髓
- (23) 流紋岩
- (24) めのう
- (25) 木炭

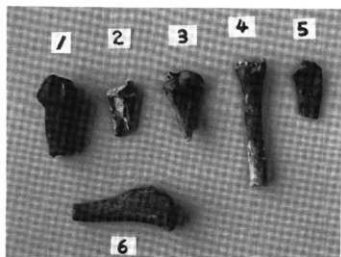
- ☆ (16~20)
一 スクレーパー
- ☆ (21)
一 ガラス状物質
- ☆ (22) 一 石鏃
- ☆ (23) 一 装身具
- ☆ (24) 一 擦痕のある自然石



← (25) =

☆参考資料

[表1] 参照のこと



第 2 次発掘調査 (Tr1・Tr2・Tr3)



☆オセドウ貝塚 目次 (第2次)

「序文」→ (第1次と共通)

「口絵」—オセドウ貝塚遠景 スナップ、出土状況— (写1~4) 77
 xpl 1~6 (復原土器) 81

「例言」 84

第1図 遺跡付近地形図 (第1次と共通) 21

第2図 トレンチ配置図 (* *) 23

第3図 セクション図 TR1、TR2—北壁及び東壁セクション図 85

第4図 検出遺構平面図 86

「本文」

(I) 発掘に至る経過と発掘要項、発掘日誌、及びトレンチの設定について 87

(II) 遺跡付近の地学的環境 (第一次と共通)

「表1」市浦村・オセドウ貝塚出土、石器、石製品一覧表 89

「表2」市浦村・オセドウ貝塚出土、骨類調査表 92

(III) 出土遺物 94

a) 土器・土製品 (APL 1~12) 94

b) 石器 (SPL 1~3) 95

c) 貝類 (Kpl 1) 95

d) 骨類 (bpl 1~4) 96

e) 須恵器、土師器等 (apl 1-2・3) 96

(IV) 考 察 97

☆参考文献

- 1、円筒土器文化 村越 潔著 (考古学選書10) 雄山閣
- 2、原子遺跡 (縄文時代前期土器の編年的研究) 五所川原市教育委員会
- 3、その他一省略

☆「資料」

xpl 1~6	(復原土器)	81
apl 1~12	(破片土器)	99
spl 1~3	(石器)	111
kpl 1	(貝類)	114
bpl 1~4	(骨類)	115
apl 1-2・3	(須惠器、土師器)	99

[発掘スナップ]

写1

①

① 発掘隊記念写真



②

② 北国の5月は未だ寒い。

③

③ 埋戻し作業のようす。



[貝塚のようす]

写2

① T・R₁の状況



② T・R₂の貝層。



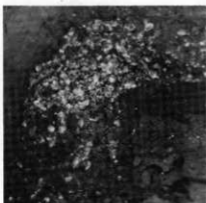
③ 貝層の状況-1 (T・R₁)

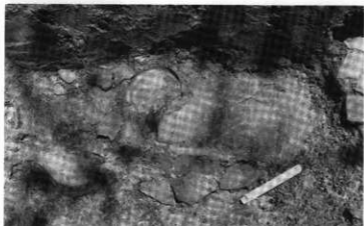


④ 貝層の状況-2 (T・R₂)



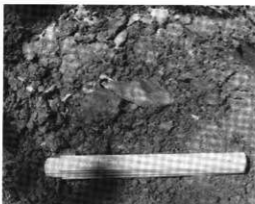
⑤ 貝層の状況-3 (T・R₁)



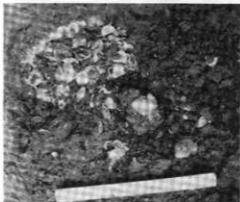


①
☆円筒下層 d₁ 式土器の出土
状況。

② 石棺の出土状況 (T・R₂Ⅲ)



③ ヤマトシジミの出土状況 (T・R₂Ⅲ)



④ 自然石の出土状況 (T・R₂Ⅲ)

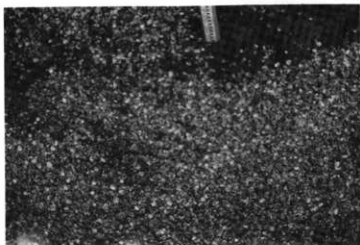


⑤ 削器の出土状況 (T・R₂Ⅲ)

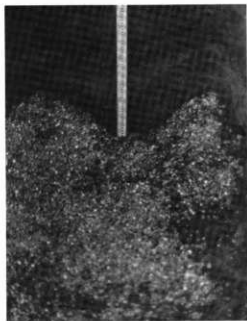


①

☆ (T・R₂) (東より)



②



☆ (T・R₂) (南より)

③ ☆ (T・R₂) (東上より)



[復原土器] その1

① T・R₂Ⅲ出土

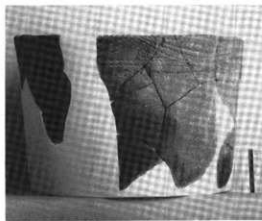
X・P・L₁

☆円筒下層 d₁式土器



X・P・L₂

② T・R₂Ⅲ出土



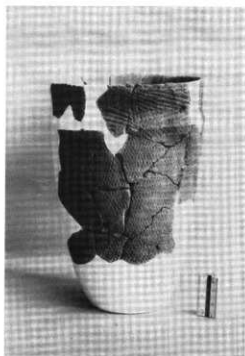
☆円筒下層 d₁式土器

[復原土器] その2

⑤ T・R₂ III出土

X・P・L₃

☆円筒下層 d₂式土器



③ T・R₂ III出土

X・P・L₄



☆円筒上層 a 式土器

〔復原土器〕 その3

☆円筒上層c式土器

④ T・R₁Ⅲ出土

X・P・L5



⑥ T・R₂Ⅲ下

X・P・L6

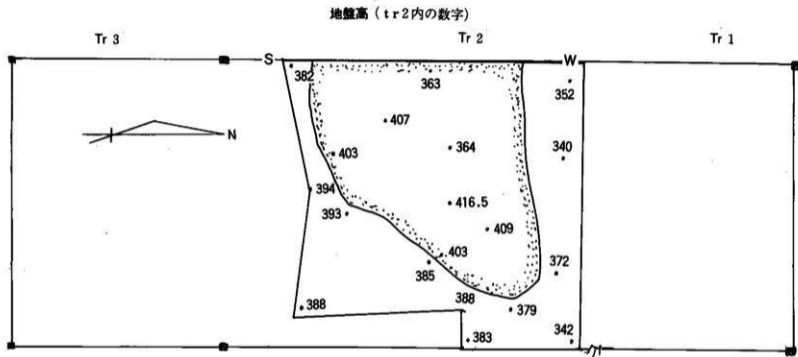


☆大木系土器（中期末）

例 言

- 1) この報告書は、市浦村教育委員会が実施した「オセドウ」貝塚の発掘調査結果の記録である。
- 2) 出土した遺物の内、骨類の調査は、早稲田大学 金子浩昌氏に依頼した。
その結果については、(表2) に示した通りである。
- 3) 報告書の内、セクション図、及び遺構の実測図、更に、遺構に関する事項については、調査員永沢秀夫が担当した。
- 4) 出土した土器、石器及び、写真の撮影、その他の一切は、調査担当者、新谷雄蔵が担当した。
- 5) 出土した遺物の一切は、市浦村教育委員会が保管し、村民の歴史研究の資料に資する。
- 6) 図面、及び写真には、必要なものには縮尺を入れてあるが、図面は20分の1としてある。
- 7) 神明宮の氏子代表の方々のご協力に感謝申し上げます。
- 8) 出土した遺物は、総て、市浦村教育委員会が保管し、学術研究の資料にするため、資料館に展示する。

[第4図] Tr₂ 貝層分布平面図 $S = \frac{1}{20} \{ B \cdot M = 19.117m \}$
 (G・Hを含む)

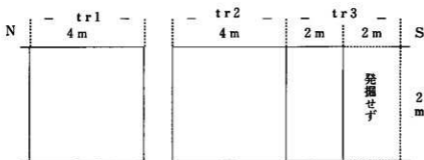


(I) 調査要項

- 1) 目的—市浦村教育委員会では、神明宮の境内に昨年のアズマヤの建設に続き、遊歩道を建設するため、国道339号より斜面に階段を設置することになった。その事前調査として、緊急に発掘調査を実施することにした。
- 2) 発掘期間—平成2年5月1日～5月8日(実働6日)
- 3) 主体者—青森県北津軽郡市浦村教育委員会 代表 教育長 木村 義光
- 4) 発掘担当者 日本考古学協会会員 新谷 雄藏
- 5) 調査員 北奥文化研究会副会長 長 沢 秀男
調査員 (地学担当) 一同上 伊 藤 昭 雄
- 6) 発掘面積—20平方メートル (tr1—2メートルx4メートル、tr2—2メートルx4メートル、tr3—2メートルx2メートル)
- 7) 発掘法—トレンチ法による。(東西2m、南北4m、—tr1、tr2、tr3とも)
なおtr1、tr2、tr3は北より南へ遊歩道の予定地に配列した。
- 8) 遺跡の所在地—青森県北津軽郡市浦村大字相内字露草190番地
- 9) トレンチの設定について (第2図参照)

☆発掘法—トレンチ法による。(東西2m、南北10mとして、北より南へ、tr1、tr2、tr3の各トレンチを遊歩道に沿うて設定した。この地点は南側と西側が斜面をなす地形である。また、tr1とtr2の間には立木があって、それを避けてtr2を設定した。また、tr3は、トレンチが深くなったため階段を付けることにした、そのため一部のみ発掘となった。

☆トレンチ配置略図 (第X1図)



☆セクションについて

セクション図は、tr 2の北壁、及び、西壁を対象として、作成した。以下、このセクションについて所見を述べる。

- (1) tr 2の北壁について—このトレンチの北壁では、貝層は、トレンチの西側に僅かに見える程度であった。しかし、トレンチの西壁を見ると、貝層が3 a層の下にあることが分かる。
- (2) さらに、tr 1の西壁の南隅を見ると、僅かに2 c層の下に貝層が見られるが、このトレンチの東壁には、貝層は無い状況である。(図示していない)
- (3) また、tr 2の東壁を観察すると、やはり貝層はない状況である。

☆以上のことから、早急な結論は、避けたいが、発掘したトレンチは、このオセドウ貝塚の東端とも考えられる。

◆セクション図(第3図、第4図) → (第1、2図は、第1次と共通)

市浦村オセドウ貝塚出土、石器・石製品等一覧表 (第2次調査)

〔表1〕

種別	類別	S. P. L. No.	No.	計測値 (長径×最大巾×器厚) cm	重量 (g)	石質	出土区・層位	
石 鐵	1	S. P. L. 1	1	2.50×1.30×0.30	0.5	珪質頁岩	Tr1	I b
			2	2.15×1.30×0.30	0.2	◇	Tr1	I b W80 S10
	2 正三角		3	3.35×1.75×0.50	2	◇	Tr1	I W70 S50
			4	2.25×1.65×0.40	1	◇	Tr1	I
	3		5	3.10×1.30×0.70	2	◇	Tr1	II上 W35西 N40北
			6	2.15×1.10×0.35	0.3	◇	Tr1	I E150西 N85
	4 長身鐵		7	3.40×1.40×0.50	2	◇	Tr1	I b W60
			8	4.70×1.30×0.50	2	◇	Tr1	II上 E135 N0
			9	4.85×1.60×0.65	4	◇	Tr1	II a上 W310 S10
			10	4.40×1.35×0.65	3	◇	Tr1	III上 W190西 S0
			11	4.00×1.40×0.70	4	◇	Tr1	I b下
			12	4.40×1.30×0.70	4	◇	Tr1	I b W130 S43
	5 鐵弧 身状		13	2.20×1.20×0.25	0.5	◇	Tr2	II上 E50 N70
削 器	1 有柄 瓶形	S. P. L. 1	1	6.60×4.20×0.90—部欠	26	建質頁岩	Tr2	III
			2	9.48×2.20×0.87	18	◇	Tr2	III上 S60南 W120西
	2 有柄 瓶形		3	5.70×2.80×0.90	10	◇	Tr1	II中
			4	6.30×6.70×1.30	34	◇	Tr2	III E160 S0
	3 小形		5	3.80×1.80×0.75	4	◇	Tr1	II中
	4 不定形		6	4.40×3.40×1.10	15	◇	Tr1	II中 第1号 土層内
			7	6.30×5.00×1.60	46	◇	Tr2-3埋房	III N45
			8	6.90×4.60×1.80	36	◇	Tr2	貝層直上
			9	5.30×3.90×1.00	17	◇	Tr2	II
			10	6.90×4.30×0.70	23	◇	Tr2-3埋房	III L336 N45
播 器	S. P. L. 1	1	7.30×4.70×1.70	65	珪質頁岩	Tr1	II a中 E150 S48	
		2	6.10×3.70×1.45	32	◇	Tr2	II上	